農地・水・環境保全向上活動事例における社会福祉施設の参加実態とその意義

The Significance of Social Welfare Institutions Participating the Conservation Activities of the Farmland, Water, and Rural Environment

○澤野　久美*，徳岡　美樹**，石田　憲治**
○SAWANO Kumi, TOKUOKA Miki and ISHIDA Kenji

1. 本報告の背景と課題

従来，農業者を中心として農地や農業用水等の地域の資源管理を行ってきたが，近年では，農業者の高齢化，過疎化や混住化の進行により，非農業者も参加した地域資源の保全管理活動が求められている。2007 年度から導入された農地・水・環境保全向上対策の共同活動においては，農家，農業団体や非農家だけではなく，老人会，子供会，女性会といった地域住民の組織や社会福祉施設など多様な主体が参加している。既往研究では非農業者や子供会の活動，学校教育と連携した活動による農村環境向上活動の促進効果が指摘されている [1)]。

一方，社会福祉分野では，ソーシャルインクルージョンの概念が提唱され，特に障がい者福祉分野では自立支援が推進されている。そのため，社会福祉施設側も地域に積極的に関わっていく方向にあるものの，実際に施設の利用者や職員が地域に溶け込むことは必ずしも容易ではない。本報告で取り上げる農地・水・環境保全向上活動の事例は，社会福祉施設及びその利用者･職員にとっても地域との接点を持つ好機であることを示唆している。

そこで，ここでは，農地・水・環境保全向上活動に，社会福祉施設の利用者・職員及び当該施設が参加する意義について，経緯や活動内容に着目しつつ，共生の地域づくりという視点から分析する。分析対象として，九州農政局管内の 3 地区 5 施設を取り上げる。

２．障がい者や高齢者向けの社会福祉施設が参加する活動の実態分析

（１）鹿児島県尾曲地区（障がい者向け施設 A）

施設 A の参加の経緯であるが，「同じ水を飲んでいる施設にも同じ目線で参加してもらいたい」と組織の代表者が声をかけた。活動内容は様々な参加者とともに彼岸花の球根を植える作業である。施設からの参加人数は，利用者 22 名，職員 5 名の合計 27 名で，利用者は「楽しんで参加していた」と職員は感じており，彼岸花についても，「特に咲いている時期には施設の中で話題になる」という。また，施設として参加することで，集落と施設 A との距離が縮まったと感じており，施設 A の運動会に参加することもある。

施設 A では，以前から農作業(トマト栽培)に取り組んでおり，彼岸花の植栽活動が，通常の農作業にも繋がることから,多くの利用者が参加できることを望んでいる。そのため，開催日を日曜日以外に設定することを要望している。今後の展開としては，彼岸花を植栽した農道に名前を公募でつけたり，スケッチ大会を実施したりするといった地域の活性化に繋がる取り組みを実施したいと組織の代表者は語る。

（２）佐賀県鶴西地区（高齢者向け入所施設 B）

施設 B は，母体の社会福祉法人の社会貢献に対する意識が高いことから，以前から，市のクリーン活動や区役にも参加している。そのような経緯から組織の代表者から加入を

所属：*農研機構農村工学研究所　National Institute for Rural Engineering・明治大学 Meiji University
**農研機構農村工学研究所　National Institute for Rural Engineering,
キーワード：農村振興，農地・水・環境向上活動，社会福祉施設

促され，公民館での説明会にも参加した。活動内容は様々な参加者とともに行う農道の草刈やゴミ拾いで，施設の男性職員 3～5 名が携わる。施設 B の場合には入所者の介護度が高いため，入所者自身の活動は難しい。しかし，地域の活動に職員が携わっていることに対する関心や評価は高い。今後も施設 B は継続して参加を希望しており，植栽や美化活動のような参加しやすい（取り組みやすい）作業があると良いと施設担当者は語る。なお，鶴西地区の場合には，施設 B の近隣に別法人の福祉施設があるものの，地域活動全般に関わっておらず，今後どのように参加の方向に導くかが課題であろう。

（３）熊本県天明地区（高齢者向け施設 C，障がい者向け施設 D，E）

天明地区では，全て母体の異なる 3 施設が参加している。従事度合いは相違があるものの農作業も行っている。経緯は 3 施設とも異なるが，農作業への法人としての地域貢献・社会貢献や,施設として地域に溶け込みたいという参加意識は共通していた。活動内容は，3 施設とも植栽や美化活動が主で，利用者及び職員が参加している。施設側の評価・位置付けであるが，施設 C では，通常施設内での仕事に従事する職員も外で作業するため，職員研修の一貫として位置付けている。施設 D の担当者によれば，利用者は外での作業を楽しんでおり,美化活動実施中に住民から差し入れをもらうこともあるという。施設 E では，安全危機管理にも繋がると担当者は語る。また，3 施設とも，美化活動等に取り組むことで環境が整備されることで地域住民に喜ばれたり，活動を通じて施設の存在を認められたりすることで地域貢献を実感している。

３．農地・水・環境保全向上活動への参加の意義－個人・組織・地域レベルからの検討－

２.(1)～(3)で示した実態分析結果を踏まえて，利用者・職員，社会福祉施設，地域にとっての参加意義について考察する。

第 1 に，利用者及び職員が地域・社会貢献的な活動を行うことで，地域住民に認められたり喜ばれたりすることを通じて，精神的に満たされ，自己実現に繋がっている。また，活動に参加する多様な人々との交流を通じて，利用者の社会参加を促すことになる。

第 2 に，社会福祉施設は，地域・社会貢献を念頭において活動に参加していた。美化活動など地域に奉仕する内容であるため，施設の存在が地域住民に認知され，施設に対する理解と協力が得やすくなることが期待される。

第 3 に，地域にとっては，地域の活性化やコミュニティ機能維持のための担い手確保が挙げられる。尾曲地区の事例で示されたように，地域活性化への萌芽が見られた。地域を支える基盤が弱体化している中で，今後，地域資源管理をはじめ，施設が様々な役割を担うことも想定される。活動参加者の個性もバラエティーに富み，能力等に差はあるが，地域資源管理の担い手の多様性が拡大している。コミュニティとして協調化する方向に多くの参加者が努力し，それらの取り組みが，地域交流の促進や地域活性化による農村振興に繋がっていると考察される。

参考文献

1)徳岡美樹・石田憲治(2010)：農村環境向上活動促進のための子供の役割，平成 22 年度農業農村工学会大会講演会講演要旨集，pp. 596-597.